



「サル化」に直面して

著者	臼山 利信
雑誌名	外国語教育論集
巻	40
ページ	iii-iv
発行年	2018-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2241/00151136

「サル化」に直面して

CEGLOC 外国語教育部門長 白 山 利 信

大学が大学らしくなくなってきた。そう感じているのはわたしだけではあるまい。ゆとりと「遊び」がなくなってきた。

わたしが学部時代を過ごした 1980 年代は、良い意味で日本社会にも日本人にもある種の余裕があった。高度経済成長期を終え、経済の成熟期に入っていた。世界第 2 位の経済大国としてすでに不動の地位を確立していた日本には自信と誇りがあふれていた。

当時わたしが知る大学の先生方の中で、「忙しい、忙しい」と言って年がら年中学内をかけずり回っているような人はあまりいなかった。先生方は自身の研究に没入し、社会のリズムとはまったく異なるゆっくりとした時間の流れの中に生きる別世界の人たちだと感じた。

上智大学ロシア語学科に在籍していたとき、恩師の 1 人である森俊一先生（ロシア語学）は、通常の授業とは別に、有志の学生たちのためにロシア語新聞や雑誌の記事を輪読しディスカッションする勉強会を週 2 回も開いてくださった。手間暇を惜しむことなく学生たちに向き合ってくださいました。ソ連末期のゴルバチョフ時代の、当時体制疲労を起こしていたソ連の政治・経済・社会問題などを的確に解説していただいた。終戦後サハリンから引き揚げた経歴を持つ森先生は、ソ連の社会構造を知悉しており、読みの深さと説得力は圧巻だった。そうした新聞の中に、『プラウダ』というソ連共産党の機関誌がある。「プラウダ（英語表記 Pravda）」というのは、ロシア語で「真実」という意味である。ソ連時代、多くの真実が隠蔽されたこともあり、「『プラウダ』にはプラウダがない」というブラックジョークに何か笑えない凄みを感じた。

また外川継男先生のこと忘れられない。西洋史・ロシア史研究の大家である外川先生は、頻りに学生たちをご自宅に招いてくださった。私も一度招かれ、食事をごちそうになった。衝撃を受けたのは、ご自宅の一室である最新の設備を整えた広い書庫だった。何列にも及ぶ自動書棚に膨大な蔵書が収められ、ボタンを押しながら、「この文献はここにあって、あの本はあそこにあって、この分野のものはあの列で...」と説明される姿に圧倒された。食事の際の話題もロシア史からソ連現代政治、スペインのイスラム化の話に至るまで、次から次へと自在に広がった。またご自身の研究スタイルや文献の整理法、研究者としての仕事の舞台裏の事情まで惜しむことなく教えてくださった。

こうした先生方の存在は、わたしの中では、当時の日本社会の豊かさとゆとりのような時代潮流と重なり合っているように感じる。効率や功利とは無縁に、先生方が学生とのつながりを大切にしてくださった。その中で学生たちも大学という共同体

との温かいつながりを深く感じていた。

今、人間社会が「サル化」しつつあるという。霊長類研究の世界的権威である山際寿一氏の指摘である。ゴリラは家族のつながりを大事にする。食事は互いに向き合いながら分け合って食べる。サルは群れの中で序列をつくり、それに応じて個体の利益が最大化される。故に個体は常に序列をめぐる激しい競争にさらされている。この「サル化」は、確かに日本を含む世界的な現象かもしれない。大学の世界も「サル化」しつつあると感じる。世界、国内、分野でランキング化され、毎年発表される順位に一喜一憂する風潮もある。そのランキングが果たして本当に誰もが納得できる指標に基づいてなされているかについての十分な検証がなされることなく、マスコミを通じて世界中にその序列情報が駆け巡る。

「サル化」する方向が果たして本当に良いのか。良きにつけ悪しきにつけ、どのような組織であれ、団体であれ、あるいは個人であれ、競争は避けられない。大学も同様だ。財政状況について言えば、今後日本の大学を取り巻く環境が良くなっていく見通しはないだろう。故に大学の世界では、より厳しい環境下での競争がさらに加速するにちがいない。しかしながら、「サル化」する方向だけでただ突っ走るのは、何かしら危うさを感じる。「サル化」する社会の荒波にさらされ続ける大学の中で、共同体としての温かいつながりを感じられる可能性やビジョンをもっと工夫して模索し続けることが大切ではないだろうか。「サル化」現象を受け止めつつも、それに抗う共同体としてのつながりを強める機能を大学に少しでも持たせるようにすることが、長い目で見ると今後の大学の持続的な発展につながっていくのではないかと思う。